

## ハウス栽培マンゴーにおけるアザミウマ類の発生活消長

後藤 弘・阿万暢彦 (宮崎県総合農業試験場)

Hiroshi GOTO and Nobuhiko AMAN :  
Seasonal Occurrence of the Thrips on Mango Cultured in greenhouse

宮崎県において、本格的にハウスマンゴーの栽培が始まったのは1987年で、1998年では栽培面積約17ha、生産量約150トンとなり宮崎県の特産果樹の1つとなっている。

しかし、宮崎県ではハウス栽培マンゴーにおいて問題となる病害虫についての知見がなく、実際に調査された例もない。そこで、今回ハウス栽培マンゴーにおいて重要な害虫の1つであるアザミウマ類について、その発生活消長と種類について調査したので報告する。

### 1. 試験方法

調査は宮崎市大字島之内の現地農家のハウス栽培マンゴーで行った。栽培品種はアーウィンの10年生、ハウス面積は約10aで、加温の開始は1月上旬、満開が1月下旬、収穫時期が5月下旬であった。

調査期間は1998年5月18日から1999年6月21日までで行った。黄色粘着トラップ(ホリバー黄色)を地上約1.8mの高さにハウス内に3カ所設置して、1週間おきに交換し、誘殺されたアザミウマの頭数を計数した。

また、1998年5月18日から月に1回ずつ、マンゴーの新葉100枚、あるいは時期により花芽・果実(幼果)を50%エタノールに浸漬して採集し、ティッシュペーパーで濾過して顕微鏡下で観察し、捕獲されたアザミウマを種類別に調査した。

### 2. 結果および考察

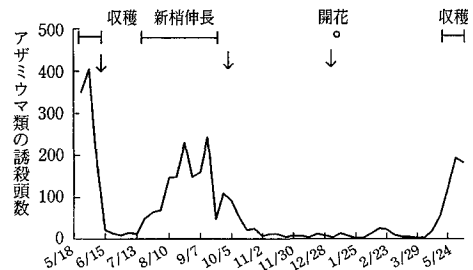
黄色粘着トラップに誘殺されたアザミウマ類の発生活消長を第1図に示した。発生のピークは大きく3回ほど確認され、1998年の収穫時期に当たる5月下旬～6月上旬、剪定後新梢が伸長する時期の8月下旬から9月上旬、1999年の収穫時期に当たる5月下旬から6月上旬であった。一方、花の開花時期には発生のピークは認められなかった。花芽の伸長前にイミダクロプリド水和剤の散布が行われており、本剤の防除効果による影響であると考えられる。

アルコール浸漬により捕獲されたアザミウマ類の種類別の捕獲頭数を第1表に示す。第1図において誘殺のピークが認められた時期に近い5月18日にはヒラズハナアザミウマとミナミキイロアザミウマが捕獲された。新梢が伸長する時期の9月16日にはチャノキイロアザミウマ、1999年の収穫時期の6月7日にはキイロハナアザミウマが捕獲された。特に、新梢が伸長する時期にチャノキイロアザミウマの捕獲頭数が多かった。一般にチャノキイロアザミウマは7月から9月の夏期に発生が多い<sup>1)</sup>が、新梢の伸長時期と重なったために、寄生しやすくなったと思われる。

今後は、アザミウマ類による加害状況、特に花芽、幼果、新梢における加害や加害種について詳しく調査する必要があると思われる。

### 引用文献

- 1) 梅谷献二 工藤 巖 宮崎昌久 農作物のアザミウマ pp 192-233 全国農村教育協会, 東京, 1988



第1図 アザミウマ類の発生活消長

注) ↓は、アザミウマ類の防除薬剤散布を表す

第1表 アルコール浸漬によるアザミウマ類の種類別捕獲数<sup>a)</sup>

	5/18	6/15	7/13	8/10	9/16	10/19	11/16	12/14	1/18 <sup>b)</sup>	2/15 <sup>c)</sup>	3/15 <sup>c)</sup>	4/12	5/10	6/7
ミナミキイロアザミウマ	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ミカンキイロアザミウマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヒラズハナアザミウマ	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
チャノキイロアザミウマ	0	0	0	0	96	0	0	0	0	0	0	0	1	0
ハナアザミウマ	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
キイロハナアザミウマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11
幼虫	12	1	0	15	144	0	2	2	0	0	0	0	0	1
その他のアザミウマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0

注) a) 100葉当たりの捕獲頭数 b) 100花当たりの捕獲頭数 c) 100果当たりの捕獲頭数